

母の633 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

ぼろり家族①「今夜はトンカツ」 落合由利子 2
ひろがる！ひろがる！紙しばい④ 橋口丈 3
親子でおさんぽ、冬もおさんぽ！ ねもとまゆみ 4-5
新刊紹介／谷川俊太郎、内田麟太郎 6
夏緑、島本一男 7



イラスト／梅田俊作

いい話ひとつ

宮川ひろ

ずっと親しくしてもらっている藤巻愛子さんが、ご主人の停年を機にふるさと山梨へ戻られて、もう十年以上にもなるでしょう。花や野菜を育て、甲州弁での昔ばなしの再話や「山梨むかしがたりの会」の主宰等々、忙しくお過ごしです。そうしたなかからも、

——桃の花でいっぱい、風までが桃色よ——

——ことしは紅葉がきれい、待ってるね——

と、四季折々のそんなお誘いが嬉しくて、中央線一本で行ける気軽さもあって、何回となく寄せてもらってきました。

あるときゆっくりと一泊させてもらって……朝の味噌汁の実にと庭つづきの畑から里芋を掘ってきたとき、東の山からおてんとさんが顔をみせてくれました。すると藤巻さんはおてんとさんに向かって、土のついたままの両手を合わせると、

——なむ、ご来光さま。なむ、ソコウインタンドウユイイツコジ——

そうって祈ったのです。わたしも祈らねばと思ったのですが祈ることばを知りません。ただ手を合わせるばかりでした。拝みおわると藤巻さんは笑って語ってくれました。

——子どもだったころね、年の近いきょうだい五人、おばあちゃんといっしょに縁側に並んで、おてんとさんを迎えて唱えて拝んだのよ。拝みおわるとおばあちゃんが、白いお砂糖をたっぷりまぶした梅干しを口に入れてくれてね、それが嬉しくて毎朝拝んだのよ。そのころお砂糖はご馳走だったものね。このころ思い出してはこうして時々拝むのよ——と。

——ご来光さまはわかるけれど、それにつづくことばはどういう意味なの——

と、わたしは聞きたがりました。すると藤巻さんはウフフと笑ってから、

——それはね、大きくなってからわかったんだけどね、亡くなったおじいちゃんの戒名だったの——ソコウインタンドウユイイツコジ礎光院澹道唯一居士——なるほど、なるほどとわたしは大きくなずいて聞きました。

どんなに農耕技術が進んでも、作物はおてんとさん次第です。照りすぎても降りすぎても困ります。だから祈ったのです。おてんとさんにご先祖さんに守ってもらってのくらしでした。一粒の梅干しは健康の妙薬。なんと豊かな朝を重ねて育たれたことでしょう。

人は子どものときにもらってきたものを根っこにして生きていくのだと思います。藤巻さんのあの温かいお人柄の根元を、みせてもらえたような嬉しい話でした。

(みやかわ ひろ／児童文学作家)

橋口 丈

はしぐち じょう／出版文化産業振興財団（JPIC）所属。JPICでは、読みきかせの講習会のほか、「上野の森 親子フェスタ」「ゆかいに漱石」「辞書を読む」「オーサー・ビジット校外編」など多様な読書推進活動に取り組んでいる。

ひろがる！
ひろがる！
紙しばい

14

J P I C（出版文化産業振興財団）は、出版に関わる人材育成や、読書推進活動を行っている団体です。活動の一つとして、全国のボランティアに向けて絵本の読みきかせの講習会を行ってきました。現在では、おもに初心者の方を対象とした「J P I C読みきかせサポーター講習会」と、おはなし会にもうひと工夫加えたい方に向けた「J P I C読みきかせサポーター実践講座」の二種類のプログラムで開催しています。二〇一六年度は、両プログラム合わせて全国三地域を訪問予定で、一二月末時点で二五地域・二五七四名の方がたにご参加いただいています。

さて、昨年度からJ P I Cでは、童心社のご協力のもと「J P I C読みきかせサポーター実践講座」に紙芝居講座を取り入れることになりました。以前より「紙芝居講座の時間を設けてほしい」という要望が多く寄せられており、その声に後押しされる形で、「読みきかせ」の講習会にも独立した紙芝居講座の時間を設けることができました。講師には〈紙芝居文化の会〉から経験豊富な方がたをご推薦いただき、約百名の参加者に向けて、演じ方から実演まで丁寧にご指導をいただいています。この講座は大変な人気で、参加者からは「今まで踏み出せなかった紙芝居を始めてみようと思っただ」「マイ紙芝居を見つけてみます」「ず

J P I C の 取り組みと 紙芝居の魅力



紙芝居講座の様子

っと自己流でやってきたが、基礎を学ぶことができて良かった」など、たくさん喜びの声をいただいております。講習会の参加者数も前年に比べて各会場平均二〇名程増えており、紙芝居への関心の高さを肌で感じています。

このように、紙芝居の人気を日々感じているのですが、紙芝居の良さとは一体どこにあるのでしょうか。私は、参加者を深い集中へと誘う、その独特の魅力にあるのではないかと思います。木製の美しい舞台、場面を抜くときの紙の音、演じ手の優しい声……。紙芝居の世界へ入っていき、そこでゆったりと漂うのは日常では味わえぬ心地良さがあります。子どもたちにとって（あるいは大人にとっても）、現実世界と豊かな物語世界を往き来するのは、心のバランスを保つ上でもとても大切なことではないでしょうか。私の好きな夏目漱石の『草枕』に次のような文章があります。

「越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、束の間^まの命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職^{てんしやく}が出来て、ここに画家という使命^{めいしん}が降^{くだ}る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑^{のじま}にし、人の心を豊かにするが故^{ゆえ}に尊^{たご}い」

J P I Cの講習会をきっかけに、人びとの心を豊かにするような演じ手がたくさん生まれれば、この上ない喜びです。

親子で おさんぽ、 冬も おさんぽ！

職場では怒る姿が想像できないと評判の私ですが（自分で言うか！笑）、家では四歳の息子にガミガミうるさいお母さんです。うるさい自分を感じると疲れちゃうものですね。そんな時は、さすが散歩に出かけてリラックス。

街中や森の小道を歩くことや、自然のなかで過ごすことはもともと好きでしたが、子どもと一緒に過ごすようになってからは、冬が一番好きな季節に。かさかさ落ち葉のつもった道なら、子どもがこつんと転んでも大丈夫。行きたいように行つてこらんと構えていられます。スズメバチなど危険生物との遭遇が少ないのも、気楽に過ごせていいですね。よく晴れて風のない日は、外にいる方が暖かい

ねもと まゆみ



自然教育研究センター所属の“インタープリター”。ツキノワグマも生息する東京・奥多摩にある自然公園「山のふるさと村」やさまざまな地域で、自然と人を繋ぐ自然ガイドとして活動。主な作品に紙芝居『だれのごちそう?』『あしあとだ〜れ?』（いずれも童心社）がある。

時もあって、得した気分。そして、なによりも好きなんです。冬ならではの子どもたちの顔。赤く染まった小さな頬や鼻を見て、血が通ってるなあ、私たちが生きてるなあ、なんてあらためて感じたりしています。

じつはにぎやか！冬の自然

冬の自然と聞くと、皆さんはどんなイメージを抱きますか？「静かそうだね」「生きものがいなくて寂しい雰囲気」という声を聞いたりしますが、じつはけっこうにぎやかだったりします。

都市部にも生息しているシジュウカラやメジロなどの野鳥は、今、お部屋探りで忙しい季節。春の繁殖期にそなえて巣づくりに適した場所を偵察しています。

天敵であるカラスやヘビに見つからない場所はどこかしら？天敵が入ってこない高い高さや角がいいわね。水場やえさ場が近くにないこと……。そんな声が聞こえてきそうなほどに、せわしなく飛びまわっています。住まいにこだわりが少ない私よりも、野鳥のお部屋探しは条件が多くて大変そう。コケや細い木の枝を運んでいる姿が見られたら、無事に新居を見つけた証拠ですね。



都会でも出会えるシジュウカラ



常緑樹で色並べ



自然物でお弁当づくり



ジャーサラダのボトルも使えます

足もとの地面にも、にぎやかな光景が広がっていますよ。早春に咲く花の多くは、秋のうちに芽を出し、葉っぱの姿で冬を過ごすします。街路樹の根のまわりを見てみると、意外とたくさん葉があるものです。それぞれどんな色の、どんな姿の花を咲かせるのでしょうか。「咲いた！」日に立ち会えたら、嬉しいですね。早春の花の一つ、ハコベの花が咲いていたら、ぜひ近くで見てください。十枚くらいの花びらがあるように見えますが、実は錯覚！花びらの数は、観察する時までお楽しみに。

冬の自然は静かなように見えますが、春にむけて準備をしている生きものたちの存在を知ってしまうと、そのダイナミックさに驚くことも！さあ、身近な場所の自然と出会いに、親子でお散歩に出かけてみましょう。

暮らしのなかにある、自然を楽しむヒント

小さなお子さんと手をつないで歩くだけでも十分に楽しいですが、暮らしのなかにあるちょっとした小道具を持って出かけてみるのもおすすめです。たとえば、ヨーグルトやジャムの空きびん。地面で拾った石ころや木の実を入れれば、コツンと響く音色を楽しめます。息子が一歳くらいの時は、出したり入れたりをくりかえして、コツン、コツン。音がなるたびに笑う姿がとっても可愛くて。次第に足もとの自然に興味を抱く姿がみられました。たくさん自然物が拾えたら、お部屋のインテリアとして飾っておくのもいいですね。空きびんのふたを閉めれば、マラカスに早変わり。空きびんをケチャップやマスタードを入れる容器に変えて

みると、プシュ、プシュと容器をもむたびに、自然物の匂いが楽しめる。香りボトルに。使い古したお弁当箱も魅力的です。自然物を、おかずやおにぎりに見立てて、親子でお弁当づくりをしてみると、通い慣れた公園などにも意外とたくさん自然物があることに気がつきま

自然物は、友だち

ファンタジーの世界に浸ることができ、幼児期には、落ち葉の形や模様を見ながら、生きものの顔に見える部分を探す

体験もいいですね。落ち葉を一枚拾ったら、いろいろな角度から見ると、虫食いの穴が目に見えたり、破れた部分が笑った口に見えてくることも。自然物を友だちのように思える事は、自然を命あるものとして大切に思う心を育む機会になると思います。

自然との触れ合いは、決して自然豊かな場所ではできないものではありません。どんな街にも、街路樹の道や、花や木が植えてある公園があったりしますよね。一本の木にも、一枚の葉にも、お子さんとの遊びや発見につながる可能性がありますし、限られた自然だからこそ気がつけることも。

「自分」と「お母さん」のバランス

自然と親しむ体験は、子どもたちの健やかでのびやかな心身を育む機会になりますが、私たち大人にとっても感性や遊び心を豊かにし、肩の力をぬいて日々を楽しむ視点を身につけることができそうです。私は、お母さんである自分と、自分らしい自分のバランスをとる時間を、自然からもらっている気がしています。親子でおさんぽ、冬もおさんぽ。とってもオススメです！

中川さん、元気そうだね、ぼくもまあまあ元気に誕生日を迎えて85歳になりました。君は2月14日だったよね。ぼくは『詩めぐり』（筑摩書房）って詩集を出してるんだけど、（買ってくれたよね）これは1年365日+閏年の1日に1篇ずつ詩を書いた本。2月14日の詩は次の通り。

あっちへ行けよ／こっちに何かあると思うなよ／少なくともあっちには風車がある／ウォ！

それはさておき、『きょうは たんじょうび』に出てくる園長先生は誕生日が2回あるんだってね、後の方でどうして2回あるのか種明かしがあるんだろうと思って、終わりまで見たけど、それがいいんだよ。僕が何か見落としてるのが、想像力が不足なのか、読者の皆さんの意見が聞きたい。

1年って短いようで長くて、長いようで短いものだって知ってた？ ぼくがそれを知ったのは後期高齢者になりかかったあたりだったかなあ、毎年山梨の方の桜祭りに行ってたところ。地面に横たわってしまった桜の老樹の幹から花が咲いていたな、生きもののエネルギーって怖いよね。

最後のページの2羽の小鳥かわいいね、ヒトの子どもも含めて生きものの子どもはみんなかわいいな。じゃ、またね。

（たにかわ しゅんたろう／詩人）



「きょうは たんじょうび」
中川ひろたか／文
村上康成／絵
本体価格1300円＋税

たんじょうび絵本、
読んだよ

谷川 俊太郎

ナンセンス絵本
なのです

内田 麟太郎



「ノボルくんとフラミンゴのつえ」
昼田弥子／作
高島純／絵
本体価格1300円＋税

わたしの住む羽村市にも動物園がある。むろんフラミンゴもいらっしやる。先日、わたしはそのフラミンゴ氏にお尋ねした。「フラミンゴは、いつも片脚で立ってて、ふらふらしないんですか？」。するとフラミンゴ氏はいきなり「フラ・ミン・ゴー！」と叫ばれた。

（なんじゃい？）

きょとんとしているわたしに、フラミンゴ氏はおごそかにいわれた。

「絵本『ノボルくんとフラミンゴのつえ』を読むがいい」

早速わたしは読んでみた。お話を書かれた昼田弥子さんはヘンなひとのようである。フラミンゴの脚は取り外しが自在で、杖になるとおっしやるのだ。たしかに腰の悪いゴリラのおじさんが、フラミンゴ脚杖をついておった。

「う～ん、なんたるナンセンス！」

おどろくわたしに、ハリネズミのお医者さんまで登場し、ゴリラのおじさんの腰に、自分の針をちくり。たちまち腰痛は全快した。

で、腰の悪いぼくのおじさんとぼくのことですが、それは書けません。それにしても受賞作の絵が高島純さんとは、昼田さんはなんとというシアワセ者でしょう。表紙も祝・旭日昇天とばかりに赤であります。ああ、昼だ。

（うちだ りんたろう／絵詞作家）

BOOK

知識は恐怖をくぐり
いのちを守る力となる
夏緑



「火山列島・日本で
生きぬくための30章
—歴史・噴火・減災—」
夏緑／著
末藤久美子／絵
本体価格3700円＋税

2014年9月27日、民謡「木曾節」で有名な御嶽山が噴火し、多くの登山客がまきこまれた。死亡者58名・行方不明者5名という大きな被害に比べ、登山客が撮影した写真や動画は衝撃的で、くりかえし報道された。

2015年には箱根の小さな噴火が富士山大噴火の前兆と騒がれ、2016年には熊本地震をきっかけに、阿蘇山が破局噴火すると恐れられた。

日本には110の活火山があり、そのうち50がとくに警戒の必要な常時観測火山という火山列島だ。いつ誰がどこで噴火の被害をうけてもおかしくない。だから万一の事態にそなえるための警告や教訓は不可欠だが、いたずらに不安をあおるのでは子どもたちに未来を絶望させ、社会の混乱をまねくばかりだ。

1000年以上の昔、古代の日本社会には混乱している余裕はなかった。火山という圧倒的な自然を科学的に解明しようと、調査・観察・記録し、減災対策を神話の形に組みこんで口伝えで広め、災害にそなえた。また火山の神をまつことで不要な不安をおさえ、社会の正常化に役立てた。

不安を安心に変えてくれる本。これは以前、わたしが重心社から出版した『子どものための防災BOOK』の制作中に、東日本大震災被災地の小学校長先生からいただいたお言葉だ。それは本書においても重要なテーマとなっている。

歴史と科学の両面から、本書は火山の不安を安心に変え、減災を伝える。

(なつ みどり／作家)

松谷みよ子さんの「モモちゃんのおはなし」全3巻の紙芝居を下読みした時に、ストーリーから何かとても温かいものを感じました。さっそく『モモちゃんにきたぞうさん』を選び、40人ほどの子どもたちの前で演じてみると……予想通り、子どもたちは釘づけになり、言葉一つひとつに対して一言も聞きのがすまいという真剣なまなざし。ぞうさんがモモちゃんのところに遊びにくるという少し突飛な設定も、イメージ豊かな子どもにとっては何ら問題なく、逆に、ちょっといじわるでさびしがりのぞうさんの気持ちに、ぴったり寄り添う表情が印象的でした。

別の日、今度は夕方の異年齢保育の中で4～5人を相手に『モモちゃん「あかちゃんのうち」へ』を読みました。この日は子どもたちの近距離で演じたため、彼らのまなざしの奥にある優しさ、怒り、喜び……そんな心の動きが、手に取るように伝わってきました。

『あかちゃんとおるすばん』は、牛乳びんや、スプーン、たまごといった、子どもになじみ深い物たちに命を与え、ひとりでお留守番をする不安感と責任感との葛藤、自立心といった、子どもの“よりよく育とうとする心”を応援する作品です。

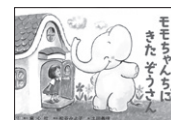
どの作品も、私にとっては「子どもの素晴らしさを、わかってよ、伝えてよ」という、松谷さんからの熱いメッセージ。大切にしたい作品です。

(しまもと かずお／諏訪保育園園長)

松谷みよ子
モモちゃんのおはなし
セット定価 (全3巻)
本体価格5700円＋税
各本体価格1900円＋税



モモちゃん
「あかちゃんのうち」へ
松谷みよ子／原作
相星真由美／脚本
土田義晴／絵



モモちゃんにきたぞうさん
松谷みよ子／脚本
土田義晴／絵



あかちゃんとおるすばん
松谷みよ子／原作
水谷章三／脚本
土田義晴／絵

子どもの心が動いている！
島本一男

2月の新刊図書!

単行本図書

でんしゃがきました

三浦太郎 / さく・え
本体価格1300円+税



でんしゃはガッタン ふみきりカンカン…。
かわいい動物たちのまっている駅にやってきたのは、おいしそうなたべものの電車です。

五味太郎 おでかけシリーズ げんきにおでかけ

五味太郎 / さく
本体価格1000円+税



きつねの子がげんきにおでかけ。“どんっ”。
出会うものに、つぎつぎにぶつかって……。
ちょうしはじょうじょう、いいかんじ。

展覧会
のお知らせ

童心社60年展

—ずっと子どもと もっと子どもと—

1957年の創業以来出版してきた絵本と紙芝居から、貴重な原画や資料、立体展示などが盛りだくさんです。
ぜひ、足をお運びください。

2017年3月18日[土]～4月9日[日]

10:00～19:00(最終日は17:00まで) **入場無料**

銀座・教文館ビル(東京都中央区銀座4-5-1)
(9F ウェンライトホール /
6F ナルニアホール)

童心社
創立60周年
記念

公募
のお知らせ

かみしばい作品 & 脚本募集!

紙芝居のさらなる可能性を追求するため、新しい作家の発掘を願い、創作紙芝居の作品・脚本を募集いたします。
募集期間：2017年3月1日～2017年7月末日(消印有効)
応募資格：プロ、アマ、国籍は問わず。高校生(もしくは同年齢)以上。

詳細は童心社ホームページへ <http://www.doshinsha.co.jp>

2017年2月15日発行(毎月刊)
母のひろば 第633号
定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03(5976)4402
編集発行人: 大熊 悟
童心社のホームページ:
<http://www.doshinsha.co.jp/>
フォーマットデザイン: bise inc.

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。

購読料金は1年分600円(送料とも)。



読者の声

単行本図書

魔法の庭へ

日向理恵子 / 作
三角芳子 / 絵
本体価格1350円+税



学校でからかわれても、自分の生きる場所を愛して生きようと願う主人公から感動をもらいました。ホルタに謝りたくて星くす草の種をまき続けたおばあさんと、自分の本当の気持ちを失っていたホルタの気持ちが伝わってきて、二人が仲直りしたシーンでは泣きそうになりました。
(東京都 I・T 十一歳)

絵本・子どものひろば

はしれ ディーゼルきかんしゃデーデ

すとうあさえ / 文
鈴木まもる / 絵
本体価格1400円+税



同僚から、電車好きの息子にいただきました。あの震災を、擬人化された電車の視点から伝える方法があったのですね、自然のきびしさ、怖さ、人のあたたかさや懸命さが、優しい色鉛筆のタッチで表現されていて、大人も引き込まれました。
(東京都 E・S 三六歳)

あとがき

●「そのチューリップをください」と言ったら「薔薇ですね」と花屋に冷たく返されたことがあるくらい草木のことがわかりませんが、新緑には感激します。渓流で熊の痕跡に怯えたり、間抜け面の羚羊や座り立ちした鼬とにらめっこしたりすると、命が少し若返ります。日脚も伸び梅の花も綻びました。早く暖かな春が来るよう太陽神に祈っています。◎

●自分が家庭を持つようになってから、家族ってなんだろう?と考えるようになりました。新連載「ぼろり家族」では、『働くこと育てること』という著書もある写真家の落合由利子さんが、現代のさまざまな家族に出会い、垣間見える「素」を見つめていきます。時代と共に変化する家族の様態、子育て。でも、変わらないものもきっとあるはず。◎